

氏 名	石橋 かず代
学位の種類	修 士 (看護学)
学位記番号	修 士 第 1 8 4 号
学位授与年月日	平成 2 7 年 3 月 1 0 日
学位論文題目	小児がん経験者の職業準備行動の実際

## 論 文 内 容 要 旨

※整理番号	189	(ふりがな) 氏 名	石橋かず代 (いしばし かずよ)
修士論文題目	小児がん経験者の職業準備行動の実際		
<p><b>研究目的</b> 治療が終了し職業をもつ成人期にある小児がん経験者がどのように職業を選択し就労に至るのか、その準備行動の実際を明らかにすることを目的とする。</p> <p><b>研究方法</b> 職業をもち現在の職業に就き3年以上経過した20～30歳代の小児がん経験者6名を対象に、半構造的面接を行い、得られたデータを質的記述的に分析した。</p> <p><b>結果</b> データ分析の結果、10のカテゴリー、38のサブカテゴリーを抽出した。以下カテゴリーを【 】, サブカテゴリーの一部を&lt; &gt;で示す。&lt;制限のある学校生活を悲観&gt;&lt;通院のため学校を欠席することに躊躇&gt;より【学校生活で疎外されることへの懸念】、&lt;長期入院により社会性が低下&gt;&lt;自分の存在を悲観的に評価&gt;より【長期入院によるホスピタリズムに苦悩】、&lt;抗がん剤治療等の辛い入院生活を回想&gt;&lt;闘病生活を共に過ごした友人の死に動揺&gt;より【病識を持つことで体調の悪化を心配】、&lt;挫折を機に進路を再検討&gt;より【能力を超えない職業を選択】、&lt;病気の話題にふれずに面接に臨む&gt;&lt;緊急時を想定して上司に病気を告知&gt;より【病気を他人に告知することに躊躇】、&lt;病気を告知した後も職場の支援は変わらない&gt;&lt;家族の寄り添いで奮起&gt;より【周囲の人の支援に奮起】、&lt;小児病棟での入院生活を楽しむ&gt;&lt;自分と照らし合わせて病む人の支援を意図&gt;より【闘病体験を肯定的に解釈】、&lt;特別扱いされることに嫌悪&gt;&lt;ひとり立ちを目指し奮闘&gt;&lt;サバイバーとしての使命感を支持&gt;より【がんを克服した理想とするモデルに固執】、&lt;就職を意識して実習的に経験&gt;&lt;面接時に仕事の意欲を表明&gt;より【職業を見据えた進路を探索】、&lt;合併症を抱えて仕事を継続することに葛藤&gt;&lt;身体的負荷を自覚しながら業務を継続&gt;&lt;選んだ仕事を享受&gt;より【晩期合併症を抱えて業務を継続】を抽出した。</p> <p><b>考察</b> 自分を“普通”ではないと位置づけ仲間集団から疎外された感覚をもち、長期間の入院生活により人間関係の形成に戸惑っていた。また、過去の感覚に引き戻される経験を重ねるなかで病気であるという認識を持ち始め、病識を得ることにつながっていた。そして、職業選択では、自分の能力に直面するが、次第に受け入れ、自分の能力を加味した働き方を選択し、【能力を超えない職業を選択】していた。【職業を見据えた進路を探索】し始めるなかでは、病気を肯定的に解釈し、【がんを克服した理想とするモデルに固執】し、病気である自分と職業人としての理想の自分との間で葛藤し、無理をしつつも、対処行動を自らとることで現在の仕事にやりがいと、心身に負荷のない働き方に満足し、【晩期合併症を抱えて業務を継続】していると考えられた。</p> <p><b>総括</b> 病気の自分と向き合い、折り合いをつけ、自分の能力を加味した働き方を選択することが重要であり、その選択には困難が伴うため、寄り添う支援が不可欠である。さらに、小児がん経験者は、サバイバーとしての使命感を持つことで、過剰に無理をする傾向があることが明らかとなった。経験者の思いに寄り添い、がんを克服したモデルに固執し過ぎないように余力を残す努力ができるように支援をすることが重要であるという示唆が得られた。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)  
2. ※印の欄には記入しないこと。